外国人学習者の日本語誤用例文小辞典の研究と開発

市川　保子

要　旨

文部省科研費の助成を得て、平成６年度より日本語学習者の誤用例文小辞典の開発と研究を進めている。約千の誤用文を８分野８７項目に分類した。対象とする誤用例文は、１文レベルの誤用を中心にした初級および中級前半レベルの誤用である。

誤用分類、分析に当たって、誤用とは何か、誤用の判断基準をどう設定するか、学習者の母語および日本語力のレベルをどう考えるか、誤用の頻度と誤用の傾向をどうとらえるか、など数多くの問題点が出てきている。本稿では、小辞典の開発の状況を報告しながら、誤用分析の抱える問題点に検討を加えていきたい。

【キーワード】　誤用　誤用基準　誤用判断　１文レベル

Development of a Dictionary of Japanese Language Learners' Errors

Ichikawa, Yasuko

The research on the development of a dictionary of Japanese language learners' errors has been done since 1994, supported by a Monbusho research grant. In this research, one thousand error sentences were classified into 87 items belonging to 8 fields. 'Error sentences' are defined as single sentences at elementary and intermediate level of Japanese.

The classification and analysis of errors faces several problems :

How and by what criterion is an error to be defined? How does the frequency of errors relate to the their importance? How should the learners' native tongue and their Japanese language proficiency be taken into consideration?

This paper discusses these problems while reporting on the development of the dictionary to date.

1．はじめに(研究の目的)

従来、外国人日本語学習者がおかす誤用の研究は、文法を中心に進められ[1]、現在までに多くの成果を残してきた。『日本語教育』34号(日本語教育学会1978)における誤用分析特集(鈴木、吉川、佐治、遠藤、宮崎、茅野・仁科)に始まり、『日本語学』(明治書院1982-1987)に連載された誤用分析(吉川1982-83、森田1983、水谷1984、稲垣1985、宮崎・新屋1985-86)、最近の誤用分析(小林1987、市川1989・1990、小金丸1990、佐治1991)などがその主なものとしてあげられよう。　これらの誤用分析とは別に、大規模な誤用例文を資料として収集しているものに、東京外国語大学外国学部付属日本語学校(11976-1979)の助詞・動詞を中心にした誤用研究、また、寺村が特別推進研究の分担研究として行った寺村秀夫(1990)[2]の誤用分類がある。後者では3131の誤用例文が納められ、コンピュータで検索できるようになっている。

このように多くの誤用研究がなされているにもかかわらず、しかし、一方で、我々日本語教師がある文法項目を指導しようとするとき、その項目に関して学習者がどんな間違いをするのかが、網羅的に、わかりやすく整理・分類された誤用例文集が存在しないのも事実である。東京外大の資料対象は助詞・動詞のみであり、寺村のデータは分類のラベル付けが施されているものの、訂正や誤用要因分析はなされていない。また、他の誤用分析研究も、特定の言語を母語とする外国人を対象にしていたり、分析対象の項目が ad hoc であったり、部分的であったりする。

筆者は、従来の誤用研究の成果をふまえ、明示的、かつ、教育現場で役に立つように分類・分析された「誤用例文小辞典」の研究と開発が必要と考え、文部省科学研究費の助成を得て、平成6年度より日本語学習者の誤用例文小辞典の研究と開発[3]を進めている。

本論文は、「誤用例文小辞典」の研究と開発を、誤用分析としての理論的側面とその実際的側面とからとらえ直し、検討することを目的とする。

2．誤用分析研究の理論的側面

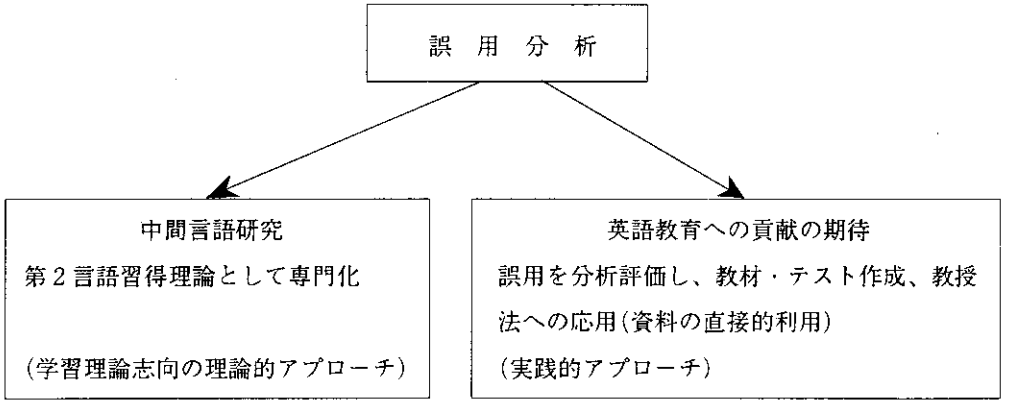
「誤用例文小辞典」の理論的位置付けを考えるために、本節でこれまでの誤用分析研究の流れを少し概観しておきたい。

2．1　誤用分析研究の流れ

誤用分析は第2言語習得あるいは言語(英語)教育学に位置付けられる比較的新しい研究分野である。その始まりは、Corder(1967) "The significance of Learners 'Errors" とされているが、当時の言語教育界は、言語習得論としては習慣形成論(Audio-Lingual Habit)が大勢を占め、学習者の誤りは母語の干渉として説明されていた。Corder(1967)は学習者の言語の誤り、errorは、学習者が学習段階において目標言語に対して持っている自己の仮説(transitional competence過渡的能力)をうかがわせる資料であるとしてerrorの重要性を強調した。Corderは、Error　Analysisという概念を前面に出し、この「不安定で過渡的な性格を持つ学習者言語」を中間言語 interlanguage として位置付けている。誤用分析および中間言語研究は、その後第2言語習得研究の中心的地位を確立し、統語レベルから音韻、形態、社会言語学の各レベルへと第

2言語習得理論としてますます専門化されていった。

他方、誤用分析はその出現当初から言語教育への貢献も期待されていた。誤用分析研究が担う2つの側面は、次図のようにまとめられる。



2．2　誤用分析の方法

Corder(1971)は誤用分析の分析過程には次の3段階があるとした。

1）　誤りの認知(recognition)

2）　記述(description)

3）　説明(explanation)

第1段階の「誤りの認知」は、ある発話が誤りかどうかを判断し、誤りと認められた場合、原文の意図に近い文を再構成する段階であり、第2段階「記述」は、学習者の文とそれを再構成した文とを比較分析し、言語学的な記述、説明を行う段階である。

また、第3段階の「説明」は、最も重要な段階で、学習者の誤りをもとに、その原因または学習者の持つ学習方略について心理学的な説明を与える段階である。

第1段階の誤答認知過程のモデルを示した図1は、実際に誤用分析を行う際のプロセスを表していると言える。

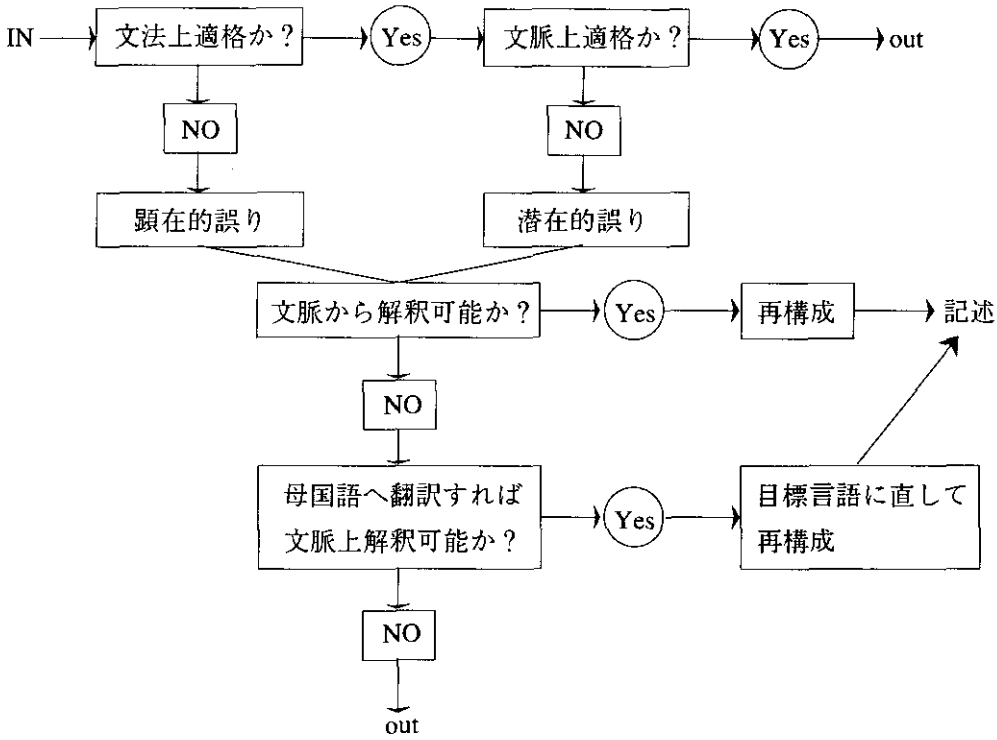


図１　Corder(1971)の誤答認知過程の簡略化モデル

(1971:156)

第２、第３段階は、誤りの言語学的分類、心理言語学的説明を目的としたものであり、現在では、単なる目標言語学習上の困難点発見から、誤用の原因解明に重点が置かれ、原因別分類が行われるようになってきている。また、学習者と目標言語のあいだに生まれる誤りだけでなく、教師の働きかけによって生じる誤りなども指摘されている。原因別の分類には次のようなカテゴリーが考えられてきた。

１）　母語干渉による誤り

２）　母語干渉以外の誤り

(1)　言語内の誤り

目標言語の構造そのものが困難であったり、既習の言語規則を未知の構造に適用しようとした際の誤り（類推・過剰般化）

(2)　発達上の誤り

(3)　誘発された誤り

(4)　伝達方略に基づく誤り

・内容放棄・形式置換・内容調整

(5)　学習方略による誤り

分析法においても、文法規則への整合性(conformity)だけからでなく、コミュニケーション重視の観点から、誤りの理解可能性(comprehensibility)や、聞き手や読み手に対する不快感(irritation)なども取り入れられてきている。

また、誤りの重要度の決定(誤りのランク付けの試み)についても、多面的な評価方法の必要性が指摘されている。分析にどれを優先させるかは、誤りの訂正にどれを優先させるかなど、誤用分析の実践的応用の側面に大きく関わってくると考えられる。

3.「誤用例文小辞典」の実際的側面

3．1　作成目的

今回開発研究中の「誤用例文小辞典」は、日本語教師が手軽に持ち運びができ、必要に応じてすぐ利用することのできる簡便な辞典を目指した。以下、小辞典作成の目的は次のようである。

1）　日本語教師の指導に役立つ小辞典であること。

2）　わかりやすく、平易に整理・分類された小辞典であること。

3）　取り上げる項目は、部分的でなく、できるだけ網羅的であること。

4）　誤用箇所の分析だけでなく、関連要因の見えるものであること。

5）　例文に加えられる説明は、できるだけ指導に役に立つ方向を心がけること。

3)は、従来の誤用研究が、取り上げる項目については深く分析されているが、項目が部分的で、ad hoc であることからの反省である。小辞典では、分析が浅くても、できるだけ多くの項目について誤用例文と説明が施されていることを目標とした。4)については、誤用は単独要因で起こることは少なく、他の要素と関連して起こっている場合が多いという観点に立って、誤用要因を関連づけて分析することを心がけた。

3．2　作成経過

「誤用例文小辞典」作成は次のような経過で行われた。

1）　外国人日本語学習者の作文、短文テストなどのデータの収集。

2）　収集した誤用例文のコンピュータ入力。

3）　誤用判断基準の設定。

4）　データの、項目別、誤用別分類。

5）　誤用訂正。

6）　誤用例文の取捨選択。

7）　誤用例文の収集・補充。

8）　誤用要因の分析・整理。説明の記述。

9）　誤用の相関分析。

1)のデータは、本研究の開始された平成6年以前の、筆者が日本語教育に携わってきた期間のものが中心になっている。それらのデータに、平成6年以降新たに得た作文、短文、テストでの誤用を加え、どうしてもデータが足りない場合には、寺村(1990)他からも借用した。

3．3　小辞典の内容と構成

3．3．1　分野と項目

平成7年8月段階で、約千の誤用文を以下のように、8分野(ムード～従属節)に分け、各分野を87項目に細分化した。1文レベルを対象とし、例文作成の学習者の日本語力レベルは、初級および中級前半レベルの誤用が中心である。

3．3．2　各項目の構成

1　ムード
　1. たい　2.しよう　3. つもりだ　4. てほしい
　5. なければならない　6. (た)ほうがいい　7. だろう　8. 伝聞そうだ
　9. 様態そうだ　10. ようだ　11. らしい　12. んじゃないか
　13. にちがいない　14. はずだ　15. かもしれない　16. ものだ
　17. ことだ　18. わけだ　19. べきだ　20. の(ん)だ

2　テンス・アスペクト
　1. た　2. ている　3. てある　4. ておく
　5. てくる　6. ていく　7. てみる　8. てしまう
　9. なる・ようになる　10. (し)始める·(し)出す

3　自動詞・他動詞・ヴォイス
　1. 他動詞　2. 自動詞　3. 使役·使役やりもらい　4. 受身　5.可能

4　やりもらい
　1. (て)あげる・さしあげる　2. (て)もらう・いただく　3. (て)くれる・くださる

5　取立助詞
　1. は　2. も　3.. だけ ・しか

6　格助詞・連体助詞・複合助詞
　1. が　2. を　3. に　4. で　5.から
　6. の　7. にとって　8. として　9. に対して
　10. に関して

7　連用修飾・連体修飾

8　従属節
　1. 名詞節　1. こと　2. の
　2. 連体修飾節
　3. 引用節　1. と思う　2. と言う　3. 疑問引用　4. ～という～
　4. 理由節　1. から　2. ので　3. ために　4. て
　5. トキ節　1. とき　2. てから　3. あとで　4. まえに　5. うちに
　6. 目的節　1. ために　2. ように　3. には　4. のに　5.(し) に
　7. 条件節　1. たら　2. ば　3. と　4. なら
　8. 逆接節　1. ても　2. のに　3. が・けれど
　9. 並立節　1. と・や　2 名詞文・形容詞文　3. たり　4. し　5.て

各項目は次のような構成で、分類、説明がなされる。

1） 誤用マップ

2） 誤用例

3） 誤用の傾向(誤用要因の分析説明)

4） 指導のポイント

1） 誤用マップについて

誤用というものは一つの部分(項目)だけに誤用要因があるとは限らない。むしろ、他の文要素の影響を受けて、その誤用が引き起こされる場合が多い。誤用マップは、当該誤用項目が他のどのような項目と関連して引き起こされるかの「誤用の相関」を示したものである。具体的には、誤用例文の確認の過程で、当該項目と結びついていると判断された文要素を相関項目として誤用マップに取り上げた。

2） 誤用例について

誤用例は、Dulay et al.(1982)の分類を基本に据えて、「(1)脱落 (2)付加 (3)誤形成 (4)混同 (5)位置 (6)その他」の6種類に分類した。

(1)脱落は、当該項目を使用しなければいけないのに使用していない誤用である。その項目がないと非文法的になる場合と、非文法的ではないが適切でないという場合がある。(2)付加は、脱落とは逆に、使用してはいけないところに使用している誤用である。(3)語形成は、活用、接続の仕方などの形態的な誤りが中心となる。(4)混同は、助詞「は」と「が」、ムード「ている」「てある」、自動詞・他動詞などのように、他の項目との混乱による誤用である。(5)位置は、その項目の文中での位置がおかしい場合である。語順による誤りも含まれる。(1)～(5)に属しない誤りを(6)その他に入れた。なお、各誤用例文のうしろには例文作成学習者の国籍と日本語力レベルを明記した。

(＜中国, 3＞は中国国籍の日本語力レベル3の学習者が作成したことを表す。レベルの1は学習歴半年、2は1年、3は1年半、4は2年以上3年、5は3年以上を示す。)

3） 誤用の傾向について

学習者の誤用の傾向についての説明を行った。なぜ誤用をおかしたかの原因追究を、文法上から、また、母語との関係、第2言語習得との関係などから検討した。学習者が今後もこういう誤りをおかすだろうという予測的側面からの分析を試みた。

4） 指導のポイントについて

3)の誤用の傾向のうち、誤りをおかさせないための指導ポイントを箇条書きに並べた。教師は、箇条書きされた指導のポイントを念頭に指導に当たることができる。(資料1参照)

3．4 使い方および検索の方法

誤用例文小辞典という以上、使いやすさが問題となる。現時点では、現場の教師が手軽に使える小辞典を目指しているため印刷物を予定しているが、将来的には、誤用例がデータベース化され、使用者の必要に応じて、検索できる形をとるべきであろうと考えている。この辞書の検索の方法として、印刷物

の場合と、電子化された場合を比較して並べると、次のようになる。

	印刷物	電　子　化
(1)分野別・項目別索引	目次より	分野・項目検索
(2)語句索引(５０音順)	巻末索引より	語句検索
(3)母語・日本語力レベル	各誤用例文参照	母語・日本語力レベルの、単独および両者同時検索
(4)誤用関連項目	誤用マップ参照	
(5)誤用内容検索	各項目の誤用例文より	複数の組み合わせで検索可能
(6)誤用種類検索	各項目の誤用例より	複数の組み合わせで検索可能

(5)の誤用内容検索とは、各項目の具体的な誤用検索のことである。例えば助詞「は」と「を」を混同している誤用例文を検索したければ、「×は→○を」「×を→○は」を同時に入力すればよい。(「×は→○を」は当該箇所で「は」を使うべきではなく、「を」を使うべきであることを示す。)

「は」の誤用をすべて検索したいときは、「×は」を入力すればよい。(「×は」は「は」を使うべきでない、使い方が間違っていることを示す。)

(6)の誤用種類では、「脱落」「付加」などの誤用種類と項目名を入力すれば、当該項目の特定誤用種類の誤用例文が検索できる。

４．誤用分析研究と「誤用例文小辞典」

本節では、誤用分析研究と「誤用例文小辞典」における位置付けについて考える。また、当小辞典が採用した収集方法、分類方法、判断基準、学習者の母語および日本語力のレベルとの関係、誤用の頻度などについて、それが誤用分析研究として妥当であるかを検討する。

４．１　「誤用例文小辞典」の位置付け

「誤用例文小辞典」は中間言語研究が目指す理論的研究でもなく、また、具体的な教材、教授法にまで結びついた教材提供リソースでもない。小辞典のねらっているところは、誤用の的確な分類、および把握である。実践面から見れば、取り上げられた誤用分類から、より効率的な文法導入、説明、練習、テスト問題の作成、文法教育のシラバスの改善に利用することができる。

言語教育への直接的貢献をねらいつつ、真に実践的立場から誤用分析の位置付けを試みたのは、Johansson(1975)である。Johansson(1975)のモデルで言えば、太線(筆者施す)あたりまでを当小辞典がカバーしていると言えよう。

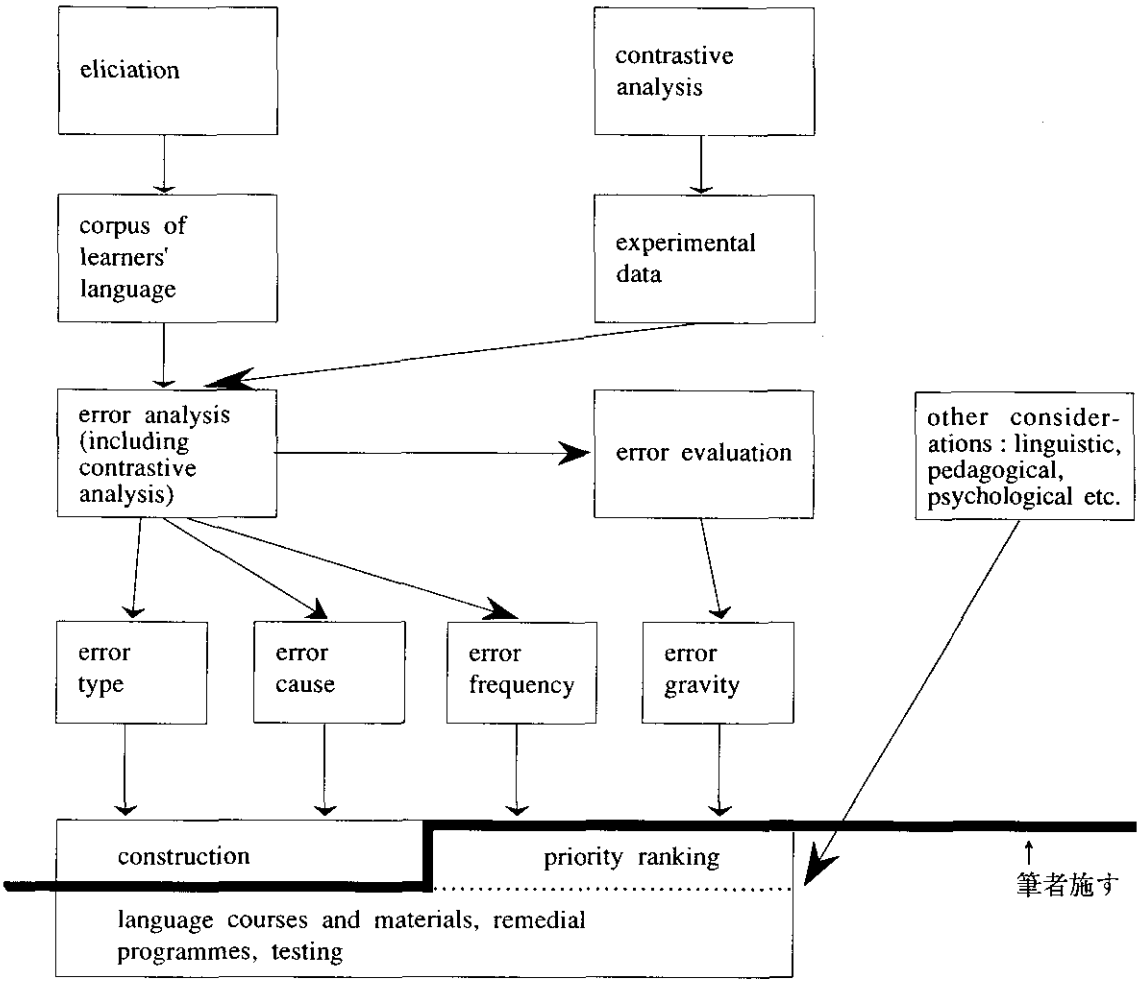


図２　誤答分析と対照分析の関係についてのJohanssonの(1975)

(1975 : 17)

４．２　「誤用例文小辞典」の抱える問題点

「誤用例文小辞典」は開発において、いくつかの問題点を抱えている。本説では、その問題点を列挙し、どのように判断し、解決したかを述べる。問題点のほとんどは、誤用研究の抱える問題であり、今回の開発研究で十分に解決されていないものも多い。

１）データ収集の方法形態

小辞典では、留学生の作文、短文、テストの解答、および、普段の授業や会話などでおかす誤用をデータとして取り上げている。収集の仕方が、身近にあるもの、手持ちの資料を利用するという方向をとっ

ているため ad hoc な面を持つのではないかという問題が残る。収集方法が ad hocであることは、データもad hoc(学習者の国籍、日本語力レベルが片寄る、誤用項目が片寄る)でしかないのではないか、という問題も存在する。この問題に対して、小辞典では、データ収集方法が ad hocであるという前提に立ち、不足の誤用例文を筆者の判断で他の資料から補足し、できるだけ客観的なデータとなるような形をった。

2） データ数

1500程度の文から、約千の誤用例文を分類の対象として選んだが、辞書と呼ぶにはデータ数が不十分であり、誤用の一般化を図るには危険ではないかという問題が存在する。

Etherton, A.R.B. (1977)によれば、誤用分析に必要なデータ数は、どの箇所が弱いかという印象を得るのに4,000～6,000、普通、必要最低限として8,000～12,000、望ましい数として20,000以上必要であるとのことである。

「誤用例文小辞典」作成において、個人作業では収集力に限界があり、数から見れば小辞典のデータ数は十分ではないというのは仕方のない面がある。誤りの出現箇所や原因については、多くの教師が経験に熟知している部分があり、小辞典でも誤用例文の採集、選択に筆者の長年蓄積した経験を生かし、数の不足を、適切な誤用を厳選するという質的な判断で補っていると言える。

3） 数の重み付け

ある項目における誤用の量、頻度をどのように扱うか、数多く現れたものは、当該項目では学習者がおかしやすい重要度の高い誤用ではないか、どこかで頻度数を示す必要があるのではないかという問題が存在する。

小辞典では、数による重み付けはしていない。量的に多く出てきた誤用はできるだけ複数取り上げたが、印刷物であるため紙幅に制限があり、取り上げた誤用例数が実際の誤用頻度を表してはいない。また、量的に多い誤用が必ずしも重要な誤用とは言えない場合もあるので、出現頻度の多かったものについては、「誤用の傾向」のところで言及するようにした。

4） 誤用の判断基準

誤用分析で一番大きな問題は、どのような基準で誤用と判断するのかという問題である。次に掲げる(1)～(4)が、判断を妨げる要因の主要なものであるが、小辞典では、複数の判断者を置くなど、できるだけ客観的判断が下せるように努力した。

(1) 発話時点での発話者の意図

収集されたデータの中には、発話者の、発話時点での意図がつかめない場合(作文などでは発話者がその場にいないなど)があり、そのような場合どう対処すべきかという問題が起こってくる。

小辞典では、データの多くは筆者が指導した学習者によるものである。ほとんどの場合、そのときの状況、文脈を把握しているのでそれを基にして判断を行った。判断のできない場合は、筆者と研究協力者[4] の２名で判断をし、客観性を重んじた。

(2) 複数の誤用の共存

学習者の作る文には、１文に複数の誤用が現れることが多く、互いが影響し合って誤用の要因がつ

かみにくい場合がある。小辞典では現れた誤用は、できるだけ項目別に(したがって、誤用が3つある場合は、3か所で)拾うようにした。また、それらの誤用が互いに関連し合って起こっているかどうかに注意を払い、関連があると判断したときには、誤用マップで関連項目として取り上げた。

(3) 正確さの基準

その誤用が文法的に正しいか否かの正確さの判断においては、できるだけ客観的な判断ができるように複数の判断者(筆者と研究協力者2名)が判断を行うように心がけた。判断者の判断を優先させ、ある程度の曖昧さ、妥協は看過した。

(4) 適切さの基準

小辞典は、1文レベルの誤用を対象としているので、文法的正確さを誤用の第一義に置き、日本語としての適切さ、自然さは第二義的に扱った。項目によっても、たとえば補助動詞(例：ておく、てみる、やりもらい等)は多くの場合、なくても　文意は通じるがあったほうがより自然だという場合が多い。このような項目に関しては、適切さ、自然さという判断基準を取り入れた。適切さの、自然さの判断は、正確さの判断より難しく、筆者と研究協力者が話し合いを続けながら行った。

5） 誤用が過渡的、変動的であること

学習者の誤用は過渡的、変動的であり、また、しばしば単なる不注意による場合もある。作文などにおいて、同じ表現を、あるところでは正しく、あるところでは間違っているということがある。「誤用例文小辞典」では、誤用とは「学習者が学習段階において目標言語に対して持っている自己の仮説過渡的能力)である」というCorder(1967)の定義に従い、過渡的、変動的であることを前提に誤用例文として取り上げた。したがって、小辞典で扱われる誤用は、学習者のある学習段階での誤用をいうことになる。

6） 誤用訂正の方法

誤用の訂正には多くの要因が複雑に関係している。誤りの種類・性質をはじめ、授業全体の目標、個々の練習の目標、時間の制約、誤りをおかした学習者の性格・実力・年齢などが含まれる。文法的正確さを重視する場合は、その訂正も厳しくし、コミュニケーションを大切に考えるときは、多少の文法的正確さは無視されるであろう。小辞典では、文法上の誤用を中心にしているため、訂正はある程度厳密に行った。

7） 学習者の日本語力との関係

3．3．2で述べたように、誤用例文のうしろに例文を作成した学習者の日本語力レベルを記した。このレベルは学習者の学習時点でのレベルを示したもので、実際に学習者がそれまで何時間学習してきたかは不明である。また、誤用例文をすべてのレベルにわたって示すにはデータ数不足である。したがって、習得の流れとして示すには不十分であるが、目安としてどのレベルで誤用が現れたかということを示した。

4．今後の課題

今回は、印刷物での「誤用例文小辞典」作成を目指したが、将来的には誤用例数を増やし電子化の方向を目指していくべきであろう。電子化を含めて、今後の課題として次のようなことを考えている。

1） 現行の誤用例文の補充

2） 分野・項目の拡充

(1) 1文レベルの中での分野の補充

（副詞、語順、文の起こしと文末、使役受身、自発態など）

(2) 1文レベルの中での項目の補充

（格助詞、取立助詞、複合助詞、副詞節など）

3） 談話レベルでの分野の拡大

（指示語、接続詞、文体、主語・主題、文の種類など）

4） 小辞典の日本語教育への活用

テスト問題作成、教授法、教材にどのように生かしていけばよいか

5） 電子化とデータベース化・検索方法の開発

誤用分析という判断基準の揺れ動きやすい課題に取り組み、日本語教育のための資料として、何らかの形として残しておきたいという思いで小辞典作成に取りかかった。

判断基準は各人によって異なる部分があり、また、分類の方法も各人の言語観、教育観によって変わってくる。「誤用例文小辞典」は、将来の誤用研究のたたき台の一つとして、提出するものである。これが一つのデータとして生かされ、より充実した誤用研究がなされることを願っている。

注

(1) 最近では社会言語学レベルでの中間言語発達研究も盛んで、コミュニケーション・ルールや学習ストラテジーなどの観点からの分析（尾崎(1993)）もなされてきている。

(2) 文部省科学研究費による特別推進研究『日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究』（1985-1989年度 代表者 井上和子）の一貫として行ったものである。

(3) 一般研究（C）「外国人学習者の日本語誤用例文小辞典の研究と開発」課題番号06680275

(4) 研究協力者として、筑波大学留学生センター非常勤講師長能宏子氏の協力を得た。

参考文献

1. Burt, M. and Kiparsky, C.（1972） *The Gooficon "A Repair Manual for English"*, Rowley, Ma.: Newbury House

2. Corder, S. Pit（1967） The significance of Learners' Errors, *IRAL*, 5:161-169

3. ――――――（1971） Idiosyncratic Dialects and Eroor Analysis, *IRAL*, 9,2:100-113

4. Dulay et al ; Krashen, S. (1982) *Language Two* Oxford: Oxford University Press
5. Etherton, A.R.B. (1977) Error Analysis : Problems and Procedres, *ELTJ*, 32:67-77
6. ohansson, Sting (1975) *Papers in Constrastive Linguistics and Language Testing*. Lund; WKGleertup
7. 石田敏子（1991）「フランス語話者の日本語習得過程」『日本語教育』75:64-77
8. 市川保子（1989）「取り立て助詞『ハ』の誤用」『日本語教育』67:279-298
9. 市川保子（1990）「中国系留学生の誤用とその対策－「は」と「が」を中心に－」井上和子編『日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究報告（６Ｂ）』平成元年度科学研究費補助金特別推進研究(1):395-407
10. 市川保子（1993）「中級レベル学習者の誤用とその分析－複文構造習得過程を中心に－」『日本語教育』81:55-66
11. 市川保子（1994）「誤用マップの一試案」『平成6年度春季日本語教育学会予稿集』:25-30
12. 稲垣滋子（1985）「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.4 1月号－6月号明治書院
13. 稲葉みどり（1991）「日本語条件文の意味領域と中間言語構造－英語話者の第二言語習 得過程を中心に－習得過程」『日本語教育』75:87-99
14. 遠藤織枝（1978）「作文における誤用例－モスクワ大学での場合－」『日本語教育』34 :35-46
15. 尾崎明人（1993）「接触場面の訂正ストラテジー－「聞き返し」の発話交換をめぐって－」『日本語教育』81:19-30
16. 小金丸春美（1990）「作文における『のだ』の誤用分析」『日本語教育』71:182-196
17. 小林典子（1987）「外国人日本語学習者による副詞の誤用－誤用例の分類の試み－」『日本語教育論集』3:29-47 筑波大学留学生センター
18. 佐治圭三（1978）「誤用例の検討－その一例－」『日本語教育』34:21-34
19. ――――（1992）『外国人の間違いやすい日本語の表現の研究』ひつじ書房
20. ――――（1991）「誤用分析の一例」『日本語学』vol.10 2月号 明治書院
21. 渋谷勝巳（1988）「中間言語研究の現況」『日本語教育』64:176-190
22. 鈴木忍（1978）「格助詞を中心にして」『日本語教育』34:1-20
23. 茅野直子・仁科喜久子（1978）「学生の誤用例の分析と教授法への応用」『日本語教育』34:57-66
24. 趙南星（1990）「韓国人の日本語学習者の誤りの評価－日本語話者と韓国誤用話者による誤りの重み付け－」筑波大学修士論文
25. 寺村秀夫（1990）『外国人学習者の日本語誤用例集』特別推進研究「日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究」分担研究「外国人学習者の日本語誤用例集、整理及び分析」資料
26. 東京外国語大学外国学部付属日本語学校(1976-1979)『助詞に関する誤用の類型（１，２）』『動詞に関する誤用の類型（１，２）』
27. 長友和彦（1993）「日本語の中間言語研究－概観－」『日本語教育』81:1-18
28. 北條淳子（1989）「複文文型」『談話の研究と教育２』国立国語研究所:7-111

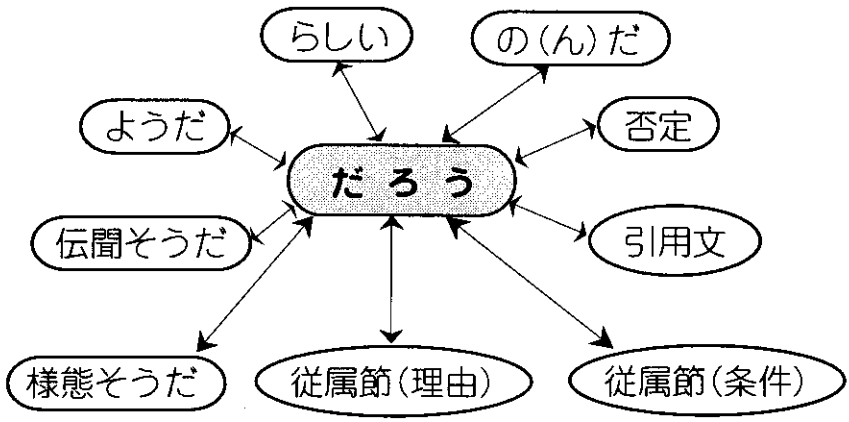
29. 水谷信子（1985）『日英比較　話しことばの文法』くろしお出版
30. ――――（1982-86）「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.3 4月号－9月号明治書院
31. 宮崎茂子（1978）「誤用例をヒントに教授法を考える」『日本語教育』34:45-56
32. 宮崎茂子・新屋映子（1982-86）「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.1 11月号－vol.54月号　明治書院
33. 森田良行（1983）「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.2　6月号－vol.5 4月号　明治書院
34. 吉川武時（1978）「誤用例による研究の意義と方法」『日本語教育』34:15-20
35. ――――（1982-83）「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.1 11月号-vol.2 4月号　明治書院

（本研究は平成6年度・7文部省科学研究費（一般研究(C)）の助成によるものである。）

【7．だろう】

意味・機能	例　　文
推測・予測	あしたはたぶん晴れる[だろう]。 １万円あれば、足りる[だろう]と思う。

(関連マップ)



(誤用例)

① 脱　落

a．異国的べきでも(→異国的であるはずなのに)異国的じゃないので(→ことから)出る反感。したしくなるのはだめだの(→という)莫然の(→莫然とした)感じ。これが被害意識だ(→だろう)か。

＜韓国,2＞

b．勉強し方(→勉強の仕方)を変えずに(→変えないと)今度の試験にも失敗するΦ(→だろう)。

＜アメリカ,3＞

c．この本はよく売れているだけあってだぶん(→たぶん)本の内容もおもしろいΦ(→だろう)。

＜韓国,3＞

d．A：リーさんの発表はすばらしかったね。

B：まじめな彼のことだから、毎日がんばって勉強していたんです(→でしょう)。　＜ホンコン,3＞

② 付　加

e．李さんは(→が)これを見た(→見たら)きっと持ちたい(→ほしがる)だろう(→Φ)にちがいない。

＜韓国,3＞

③ 誤形成

f．あしたは雨だろ(→だろう)と思います。 <ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ,1>

g．あしたは雨でしょう(→だろう)と思います。 <ｱﾙﾊﾞﾆｱ,1>

④ 混 同

(×だろう→○ようだ／らしい)

h．金さんはこのごろいっしょげんめい(→いっしょうけんめい)するだろう(→しているようだ)

<韓国,3>

i．天気予報によると、あした雨がふるだろう(→ようだ)。 <ﾀｲ,3>

(×だろうか→○ではないだろうか)

j．日本は世界に(→で)ただ一つのこんな特徴を持つ国だろうか(→ではないだろうか)。

<ｱﾒﾘｶ,2>

k．たぶん、これは日本人にとって宗教が大切じゃないようの(→ことの)理由だろか(→ではないだろうか)。 <ｱﾒﾘｶ,2>

(→×だろう→○ではないか)

l．２週間も黙って家をあけるには(→のは)わがままなことだろう(→ではないか)。 <ﾎﾝｺﾝ,3>

(×ではないだろうか→○ではないのではないだろうか)

m．今の２１才の私が(→は)どんなに親に迷惑をかけたか分かって来たが今は口で謝るより仕方がない。親に非常に迷惑をかけたと思っている人は私だけではないでしょうか(→ではないのではないだろうか)。 <ｱﾒﾘｶ,4>

⑥ その他

「副詞」

n．毎日たくさんのチョコッレート(→チョコレート)やアイスクリームなどの高脂肪Φ(→の)ものを食べると、きっと太るわけだ(→だろう)。 <台湾,4>

「従属節・理由」

o．もう１０時Φ(→だから)、彼女は来ないだろう。 <中国,3>

「名詞節」

p．その事Φ(→を)しらなくて(→知らないのは)、まだわかいからだろう。 <ﾍﾟﾙｰ,3>

(誤用の傾向)

「だろう」は話し手の主観的な推量を表す。

①彼は今日は来ないだろう。

②彼は今日は来ないようだ。

③彼は今日は来ないらしい。

①の「だろう」と、やはり推量・推定を表す②③の「ようだ」「らしい」を比べると、「ようだ」「らしい」は何らかの根拠、状況に基づいての推量判断であるのに比べ、「だろう」はより話し手の主観を表す。a.～d.は話し手の想像に基づく判断であるため、「だろう」があったほうが自然な文になる。(a.～d.の中で、a.とd.は「だ」「です」を「だろう」「でしょう」にできなかった例である。

動詞	い形容詞	な形容詞／名詞＋だ
行く	暑い	元気
行かない＋だろう	暑くない＋だろう	元気じゃない＋ だろう
行った	暑かった	元気だった
行かなかった	暑くなかった	元気じゃなかった

j.～m.は、否定「ない」が欠けている文である。日本語ではある事柄を「そうだ」と思って相手に同意を求めるとき、否定の形を使って提出することが多い。「～だろうか」を、もし肯定の形(例：本当だろうか)で出せば、「実際はそうではないのではないか」という疑いの意味合いになり、「～ではないだろうか」(例：本当ではないだろうか)では、「きっと／たぶんそうだ」というより確信的な意見の提出になる。j.は、したがって、否定の形にしなければ、逆の意味、すなわち「日本は世界でただ一つそのような特徴を持つ国ではない。他にもこのような特徴を持つ国がある」ということになる。k.も同様で、「これは日本人にとっての本当の理由じゃない」という意味合いになる。m.はもう一度否定にしないと、親に迷惑をかけたと思っているのは「私だけだ」ということになる。また、m.では、前文が普通体であるのに、後文が丁寧体になっている。「でしょうか」を「だろうか」にすべきである。文体の問題とは別に、「でしょうか」と「だろうか」の使い分けも問題になる。前者は特定の聞き手(相手)に対する問いかけであり、後者は特定の聞き手に対するというより、話し手自身の疑いを表す。

「の(ん)だ」《→ムード「の(ん)だ」》の中でも取り上げるが、学習者は「だろう／でしょう」に「の」を付けるべきか否かでしばしば誤用が起こす。

④彼は今日は忙しいだろう。(単純な推量)

⑤彼は今日は忙しいのだろう。(ある根拠・状況に基づいた推量)

「だろう」は、ある状況の中で推量をするため、やはり状況設定の表現が必要となる。e.,i.,n.のように条件節で示される場合、c.,d.および「その他」o.のように理由節で示される場合などがあり、いずれもそれらの従属節との関わり方がわかっていないと「だろう」が適切に使えないことになる。

また、「だろう」は「だろうと思う」の形で使われることが多く、「と思う」に正しく接続できないとf.,g.のような誤りが起こる。

「その他」の文法項目ではn.に見られるように副詞との関わりも考えられる。